道あり

英留学 世界の織物に刺激

染織家 築城（ついき） 則子（のりこ）さん 71 ⑦

染織家としての幅をさらに広げたのが、2007年、文化庁の新進芸術家海外留学制度に応募して滞在した英国での日々だった。約80日間、ロンドンの「ビクトリア&アルバート博物館」で研修を受けた。

同館は、17世紀フランスや20世紀東南アジアなど様々な時代や国の染織品を収蔵しており、作業を進めた。とても思いつけないような織り方や染め、刺しゅうなどを目にする中で、生地はそれが生まれた土地が持つ力強さや自由さを放つのだと悟り、織物の奥深さに圧倒された。

小倉織の復元後、自身の世界観とかけ離れた作品を凝縮に見つめたのは初めて。「それまでの自分が、小さな世界で勢いだけで突き進んできたことの怖さと、創作への畏怖を感じた」。立ち止まってイメージを深める時間を大事にしようと心に刻んだ。

帰国後に織り上げたのは、月明かりが注ぐ英国の田園風景をイメージした帯。世界中の生地から色を「足す」だけでなく「引く」ことを学んだ経験を生かし、縞の濃淡などで月の照らし方の違いを表現した。「月影」と名付けたこの作品は、08年の日本伝統工芸染織展で文化庁長官賞を受賞した。

デザインは織物以外にも広がった。11年に新築移転した北九州市の九州労災病院では病室や待合室の内装を手がけた。「病院は元気になって復活していく」と提案され、「伸びやかなストライプが生きる活力になるのでは」と思えた。

その後も北九州空港のラウンジや地元銀行の通帳、同市職員の名刺などに使われ、15年には地元百貨店の「井筒屋」が紙袋や包装紙に採用。当時担当した同店の榎田兼久さん(40)は「品や落ち着きを感じる柄で、百貨店にぴったり」と話す。

小倉織の縦縞が「北九州の顔」とも言えるデザインに成長しても、夫の健義さん(74)と約束した「一工房にいるのは日の出から日没まで」とのルールは守り続けている。自宅では家事全般に注力し、デザインを考えることもない。「太陽が出ている間が作業時間なので、夏は長くて冬は短くなります」と笑う。